特 253
520

十年（一九三五年）

を目指して!!

托鉢行脚

原始生活に かへりて

ボロ衣一枚の

田口省吾講演集 (5)

始

特 253
520

上下費

求 — 自省感恩の同朋
化 — 慈光報謝の事業
用 — 喜捨の浄財供養

（著者）

本願寺出版部

合掌

人身受ケ難シ、今已ニ受ク、佛法聞キ難シ、今既ニ聞ク此身今世ニ向ツテ度セズンバ更ニ何レノ生ニ向ツテカ此身ヲ度セム。大衆諸共ニ至心ニ三寶ニ歸依シ奉ルベシ。

一、自ラ佛ニ歸依シ奉ル、當ニ願クバ衆生ト共ニ大道ヲ体解シテ無上意ヲ起サム。

一、自ラ法ニ歸依シ奉ル、當ニ願クバ衆生ト共ニ深ク經藏ニ入リテ智慧海ノ如クナラム。

一、自ラ僧ニ歸依シ奉ル、當ニ願クバ衆生ト共ニ、大衆ヲ統理シテ、一切無碍ナラム。

無上甚深微妙ノ法ハ百千萬劫ニモ相遇フコト難シ我今見聞シ受持スルコトヲ得タリ、願クバ如來ノ眞實義ヲ解シ奉ラム。

願クバ此功德ヲ以テ普ク一切ニ及ボシ、我等ト衆生ト皆共ニ佛道ヲ成セム、南無十法三世一切常住三寶哀愍救護シ給へ。

□

眼神佛老儒を見ずして唯如來の大道のみ見、神儒佛老は如何んになれば是れ唯、道の一閃光に過ぎず。例へば太陽の一切萬有を照して其光到らざる所なきが如く宇宙の眞理は一切を照すなり。

宇宙は如來の自己啓示の姿にして人間は宇宙意識の發露たり。宇宙最深の意識は靈的音律を奏しつゝ一切を創造しつゝあるなり。

野花一輪の稍頭に宿る一滴の白露、これ本來實在そのものが己が姿を分明に描き出したる盡性の風光にあらずして何んぞ。

噫！人に罪惡苦患あり、如何にして其れを脱し得べき我造りし諸の惡業は、皆無始の貪嗔痴に由るゝ聞く我今一切を懺悔し戰塵の街頭に解脱心に由り感謝報恩の爲めに行乞せん。

思ふに宗教的至深深妙の靈的要求は一切の自我を放擲して蕩然恍惚たる無意識の默照地にして始めて接觸し得べきなり。

達觀すれば隨處爲主立處皆眞、娑婆即寂光淨土、當所解脱—總て此世からして極樂なり。天國なり。

一、求道苑—如來の金言に惰ひ救はれてゆく假りに名くるなり。（上求菩提）

一、波紋社—出家、沙門の一日は無一物、無所得、自然界、原始界の生活なり、供養の淨財は（菩提心）受く然し其の眞理に則り社會扶助奉仕事業を行ふ。（淨財の菩提化）自求道、波紋社、二位にして一体通して物心不二なり。（下化衆生）

下座合掌

はしがき

『講演に來て下さる事は、出來けませんか』と各方面から時節柄、是非にと言はれるので承知は致して居りますものゝ眞に御恥かしい樣であります。講演と申しましても、未だ若輩な私、無學な殊に何の修養も經驗もない事に、只ありのまゝを、話さして戴きますから、事の善惡は皆樣の方から御取捨をなし下さいませ。私は元來講演と云ふもの程嫌ふ事はない（上手下手は別問題として）或る意味に於て、危險な事、口では如何んな事でも話されます。『眞理は語れば無くなる』と聞いて居る。實際は無言の儘に感謝の爲めの奉仕（社會事業）や自己修養の爲の托鉢でもして居る方が、却つて眞の信仰生活の樣に又行き方の樣に思はれます。然し私の話でも眞面目に聽いて下さる方があると思ふと、より以上に（時節柄）勵まなければならないと思はれます。講演の度毎に世話係りの人々が、聽衆の有無を心配されたり、中には此處は博士の講演でも駄目ですからと云れる事もありますが、そんな事は杞憂に過ぎないの盛況で、一日が二日になる事も珍らしくなく何時も聽衆は皆つゝましやかに聽いて下さるが偶には私の不德の至りか多少失敗もあります。

講演の後に、種々の人々が御内座を――と尋ねて下さる。そして少しの力もない私に色々打ち明けて相談される事があります。其都度私はたゞ通りました足跡を有のまゝに說かして戴くに過ぎない。講演の時皆樣が心から聽かれるに甘へ、露骨に私の日常生活の一端を說明さして貰ふに過ぎないが、其影響が種々に人々の實生活の上に現はれ、百の說法よりもあなたの――、と喜ばるゝのは何か其處に、何物かゞあるのではありますまいか。まだ未熟な私が、人樣に對して講演などゝはおこがましく次第で其柄で無い事は判り切つた事である。私は何處から見ても、一介乞子の沙門、乞食坊主であります。寧ろ、皆さんの方から、敎へて貰はなければなりません。（近日は殊に有識階級のみの皆さんの前に）御話し申上げることは不徹底乍ら、何れも体驗である、然し實行無き人々には空論に過ぎぬと思はれます。私は沙門となつて早や二十八年目、此の極端な生活に更生してから十數年、歪み乍らに歩まして貰ひ、惠まれて參りました。誰れでも出來ない事はない筈、彼も人、我も人、『一切衆生悉皆佛性です。』皆さんから、是非冊子にでもなつたら、よりよく多くの人々に傳はるからと頻りに勸められるまゝ、又國家超大非常時、一九三五年を目指して、微力をも顧みず、綴りました次第であります。

昭和八年托鉢の折々に　　下座合掌

感恩のボロ衣一枚生活

（福岡日日新聞八、一、二六）

古聖は矢張り生きてゆき、法は亦永遠に傳はりゆくのである。然し夫れは道を求むる者に依りて生き得るものであり、否、求むるものの實行に依つてのみ得らるゝのである。世人は、何故に宗敎を等閑に附するや、宗敎に依れば時局問題も左程ザワ〳〵騒ぐの必要はない。

右とか左とか何處の岸邊に辿りつくやら、世は流れてゆく、エロ、グロ、モボ、モガ、ギャング、バラ〳〵事件、鐵パイプ、ケース等々。

人心の歸趨何れに傾くやら其豫想だに許さない、昔日古聖が行はれた、四條五條の橋の下の原始生活思想は物質萬能主義の人々には、お伽話かの如く思はれるのである。如何に倫理學の押賣りや、經濟學の飜譯を試みたとて世の人にはピンと來ないのである。

十五億の酒を飲み、二億五千萬圓の煙草をふかし、二十萬の藝妓をかゝえ、六十億の國債に苦しみ五十億の農村負債に生死の境、利子一億圓、一億七千萬圓の學校敎師の謝禮に頭痛鉢卷である。

人の頭を叩く人のみで、自らの頭を叩かれて感謝の氣持でゆく人は少ない。吾人は今少し眞劍に、過去の行爲を反省して意義深い人世觀を味ふべきである。大聖釋尊もキリストも街頭の人であつた。傳敎弘法、道元、親鸞、日蓮凡て草鞋を宿とし雪の軒下に宿り粗食に甘んじての生涯であつた。

宗敎は概念でなく、模型でなく、遊戯でなく、宗敎上の眞理は其の生活に於いて求むべきである。概

念としてのみの夫れは要するに準備としての模型に過ぎぬ、只法城に籠つて民衆の寄與に甘んじ、傳統的美名の下に座食し、人の死する事のみ微笑み、自己を知らず、美衣美食のみが人の能事ではない。

時代は移つた——。理論に滿足すべき時期でない、世は實行を要求してゐる。教育もその精心にかへつた實に尊き事である。眞の教育の根本精神は、寧ろ生徒を拜んでゆくの教育であり、即童心に依つて（佛心又は神心ともいふ）却つて教育されてゆく感謝敬愛の氣持ちで教育してゆくの教育であらねばならぬ。

宗教的信念に更生せよ、否「精神」にもこづけよ、不肖乍ら私は其信念と體驗とを有する。微力乍ら……、百度を超える炎天の日も、零度を下る極寒の日も、風吹く雪の夕も、薄布ボロ衣一枚の十有餘年感謝の極みである。

年中ブッ通しの無帽無足袋主義頭陀袋さげての生活は、娑婆即寂光淨土である。廢物に依つての生活人は一番最低の生活を土臺とすれば決して不足不滿は斷じてない、上座の爲めの下座でなく、下座の爲めの下座生活、得る爲めの捨てるでなく、捨る爲めの捨てる、捨てきつてゆくの捨てるの生活——を甘んじて感謝せよ、時は超非常時である。

下座合掌

ラジオ放送講演……八、一、三一　福岡放送局ヨリ

感恩生活の實行

沙門　田口省吾

唯今御紹介にあづかりました通り、田口と申しまして、眞に、とるに足らない一介乞子に過ぎない沙門であります。皆さんに對して講演がましい事はとても出來ません。只、言はば、其處らの街頭で何かつぶやいてゐるものとして、御笑草に御聽捨て下さいませ。

強いて講演と申しますれば、私が此の、みすぼらしい沙門の姿のみが講演の全体とでも、云ひませうか。此の姿に對する所感の一端を失禮をもかへりみず話させて戴きます。

△

今より已後、我、諸の弟子相傳へて道を行せば、即ち如來の法身、常に世にあつて滅せざるなり、とは、釋尊が遺教經に遺されたる金言であります。古聖は矢張り生きて行き、法は又永遠に傳り行くのであります。然し其れは、道を求むる者に依つてのみ生き得るのであり、否、求むる者の實行に依つてのみ得らるゝのであります。

世人は何故に宗教を等閑に附するのでありませうか。現今世の進むに隨つて人々に宗教的感謝報恩の生活信念が段々と薄らいで來た樣に思はれます。宗教の力に依りますれば、目下の自力更生、生活改善等の如き問題も左程、ザワ〳〵さはぐの必要はありますまい。

△

右とか左とか何處の岸邊にたゞりつくやら分りません。白い赤いは其視方に依るのでありませう。世は流れ〳〵て、眞に混沌たる世の中となりました。色々の問題が次から次へやつて參ります。

△

眞個の豫言者世に出でず、人心の歸趨、何處に傾くやら、其豫想だに許さないのであります。人の事ではない足下から鳥が飛びました。捕へて見れば已れが飼ひし鳥であつた。つぶす譯には行かないのであります。

先哲や古の聖人方が歩かれた、四條五條の橋下の生活思想は、今日の物質萬能主義の人々には、まるで昔の御伽噺かの如くに思はれるのでありませう。そゞろに古聖の足跡が、心から泌々と偲ばれてなりません。如何に倫理學の講義や、經濟學の飜譯を試みたとて、空念佛では、現今の人々には、ピンとも致しません。それ自力更生、生活改善等々の看板のみの塗替をやつたとて、海老で鯛つる式には、ゆきますまいもの、其の實行が伴はなければ、寧ろ御笑草となるのみであります。

△

世の人々は十五億の酒をのみ、二億五千萬圓の煙草を吹かし、二十萬の藝妓をかゝえ、六十億の國債に苦るしみ、五十億の農村負債に生死の境であります。一億の利子に、一億七千萬圓の學校先生の謝禮に頭痛鉢巻であります。憂國の志士が如何に腦漿をしぼつても未だに解決のつかない大問題であります世界到る所が、思想に經濟に、赤字のみで大國難打解の叫びも何日其の解決を見るやら解らないのであります。

唯物者も、唯心論者も、其主義主張のみを、稱へる許りで、破壞する事のみに狂奔して、建設する事

を識らず、砂上樓閣のみの論爭をなしつゝ、ある樣であります。

「心」此處にあらざれば見れども見えず食へども其味を知らずの認識論的思想も吾々の日常生活の体驗上、其否定は出來ないのです。如何に美しい花も、盲人には見へず、妙えなる音樂も聾者には聞えないのであります。

若し心さえ働けば、盲人にも花が見え、聾者にも音樂が聞ゆべきであります。然し事實は其樣ではありません。心と物とが相倚り相助けてこそ、物の効用も、心の活用も顯現するのであります。「身心一如」「物心不二」とは此の間の消息を語るのであります。

△

只！人の頭を叩いて喜ぶ人のみで、自からの頭を叩かれてゆく感謝の氣持ちで行く人は少いのであります。概念を說き、理論を吐き、輿論を竝べて自からの行爲は、高見の見物式で十年昔はバス出來たにしろ今日は早や、通用しないのであります。

△

吾人は今少し眞劍に過去の行爲を反省して、意義深い人生觀を味ふべきではあるまいか。世間にありのまゝを研究し、又受けついで、行くのみが人間の能事ではないのでせう。私は乍微力乍不撤底、農漁村の津々浦々まで行脚を續けてゐます。各種の團体に接觸さして戴きました。

否、寧ろ歩かせて戴きました。

△

冷靜に世相人心を思ひますのに、最近、滿洲問題、又國際問題等に依りましてか、世人の自覺が現はれつゝあります事は、乍多少、事實であります。眞に喜ばしい現象であります。故に私は、今、此の際に、其實行と努力とに、猛進する事だと思ひます。

△

此の時局に處して、恐多い事乍ら、泌々と感泣致されますのは、世界の大帝と仰ぐ、明治天皇の、大御心であります。天皇の御製に、「桐火鉢かきまぜ乍ら思ふ樣」の一首があります。或る寒空の一夜、大帝は桐火鉢を、かきまぜ乍ら、思はれる樣には、今此の桐火鉢なれども、今宵、「賤ヶ伏屋の民は今ぞ如何に」暮してゐる事ならんと一夜の間、御火鉢もなく、御過し遊ばしたのだそうであります。御崩御まで一度も御避暑になつた事もなく、御召しの御服も、御粗末の物許りでありしと、拜するも恐れ多い事であります。

又、釋尊の行かれた法の道這箇の消息を稽えましても、私等は恥かしい次第であります。且つて、宮殿から脱れられて、一介乞子の沙門と御なりになつた時、殘飯の供養を受けられたのです。如何に、釋尊も、宮殿の御生活に、殘飯を御食べになる事が出來ず、町端れに行かれて、御捨てになる時、思はれる樣に、今は一介乞子の沙門である。此の供養なくして我の生命は保ち難しと合掌されたのです。終生佛陀は如何なる物をも御捨てになる事は出來なかつたのであります。此の氣持ちと決心とを吾等同胞は

此の非常時に處して少しでも實行しなければなりません。釋尊も、キリストも、街頭であつた。傳敎、弘法、道元、然り、鎌倉街頭で法華を說ひて、狂人と云はれた日蓮、北越の雪を宿として、乞食坊主で南船北馬した親鸞は破れ衣に草鞋一足が全財產であつた。粗食に甘んじての生活は、現今の人々には如何に思はれるでありませう。

△

宗敎は概念でなく、模型でなく、遊戯でもなく、宗敎上の眞理は其生活中に於いて求むべきであります宗敎は史實に依つて實在の意義を示し、單に概念としての、其れは、要するに、實現のための準備としての模型に過ぎぬのであります。宗敎は人の多く持つ惱みを快刀亂麻的に是を解決せねばなりません。

△

時代は移つた。理論に滿足すべき時期ではありません。世は實行を要求して居ます。乍不肖、十字街頭にありのまゝの自己の姿を投げ出して、早十三年になり、乞子沙門となつて早や二十八年目になります。其儘々に轉げてゐるに過ぎない感恩の生活が種々と、周圍を導かして戴く事になるのは全く豫想外でありました。人の出來ない事をなしてゐられるとよく言はれるが、古聖も矢張り斯くしてゆかれたのでせうと思ひます。やる事に不思議はない。やつて出來ない事はないのです。生命其儘が何の障碍もなく呼吸してゐるに過ぎないのであります。此の感恩の生活が、宗敎生活の天地であります。王位をすてて行乞に出られた釋尊が二度と王位に返られなかつたのも道理でありませう。戰塵の街頭は、即大堂伽

藍であり、土下座は、却つて上座であります。總べてが最高の試金石であります。斯くして行く事が、多少でも救はれてゆく事は有難い事であります。人を救ひ、社會を救ふと云ふ氣持ちでなく、先づ自らが、懺悔内省して、道に向つて、精進する氣持ちでなければなりません。高い所から人を教育してやるでなく、己れが教育されてゆく事の感謝の氣持で、あつて欲しいのであります換言すれば、生徒を拜んでゆくの教師の敬愛教育は徹底でありませう。其處に教育の根本精神があります。

私は御蔭で今日まで暮さして戴きました。明日の日は人間の智慧では解り兼ねます。宿業その儘々に追ひ廻はされての懺悔感恩の生活は終生續くでせう。夏冬通じて不徹底乍ら——百度を越へる炎天の日も零下を下る極寒の日も、風吹く雪の夕も、勿論、放送中の今も、薄布、ボロ衣一枚、薄い木綿の袖のない肌着一枚であります。價格にして金壹圓也で、三六五日、ぶつ通しであります。帽子、足袋、傘、夏の扇子等勿論、元來所有致しません。然かも衣服は供養によるものであります。日々こちらの市街を歩きますと、自轉車で走る八百屋の御手傳の人々迄が、振り返つて見てゆかれるのであります。先日去る學校に講話に參りましたら、如何なる田口も今日海岸から吹き上ぐる吹雪には、オーバでも借つて着て來るだらうと、みんなが話してゐたと、先生の御話でした、三時の約束に一分も、遲れは致しません

昨年の夏、長崎縣の、海岸地帶を行脚してゐますと、如何にも人間が、寒中に、ボロ衣一枚で過せるものか、今は夏だから、と云はれます。半身は外部から、肉体が知れます。「人間が此の空氣に同化し自然に還つて行けば」人は裸体で、よいのであります。

原始時代は今日の如き衣服はなかつたのであります。然し人間には禮式がありますから、私は僧侶の關係上衣を着てゐるに過ぎません。要するに如何なる百萬長者の令孃にしても人の顏に、着物を着て歩く人はありますまい。要は其の人々の使命と境遇に、らしくすることであります。

今、國家に莫大の負債があると思ひますと吾人は負債の衣服を着てゐるかも知れません。假に平常に着てゐる着物を最底金壹圓（一枚）としますれば十枚着る人は拾圓になります。其内八枚（八圓）は負債かも知れません。人の生活に、必ずしも十枚の着物を、着なければならぬと云ふ規則はありません。拾枚とは是非に絹布を纏はなければならぬと云ふ事はありますまいもの。

皆樣今は國を擧げて非常時であります。

普通の決心では日本の更生は出來ません。一二枚位御脱ぎになつては如何でせう。今假りに、九千萬の同胞が一枚宛御脱ぎ下さるれば九千萬圓の金が出來ます。一億の國債利子は、一枚の着物で拂へませう。國家のためとしてです。人の本能欲として誰れしも美衣美食は善い處で誰れしも欲するのです。私にして未だ三十七才、美しい物は美しいと映じます。人は最底の生活を、基準とすれば決して、不足不滿はありません。三拾圓の收入に五拾圓の生活を欲するに由つて、漸く月賦で求めた、金の腕時計も、其處等の質屋に走らなければなりません。

食、供養に由る乞食主義　殘飯
住、辻堂、十字街頭　供養に依る人家

宗教的信念に更生せよ。否「心」に基けよ、乍不肖私は、其の信念と体驗とを有するのであります。風吹く吹雪の今宵も、ボロ衣一枚の十三年感恩の極みであります。年中ブッ通しの無帽、無足袋主義、頭陀袋下げての感恩の生活は、娑婆即寂光淨土であります。未來永遠に、歩まして頂きます。癈物に依つての生活は、無限の感謝であります。

△

「一葉落ちて天下の秋を識り、霜を踏みて堅氷の至るを識る」とは古き諺なれども、國家の爲に奮鬪すべき時期であります。一切の私利私欲を去つて、只己れ〳〵の使命に、努力を致しませう。

△

上座の爲の下座でなく、下座のための下座生活、得る爲の身を捨てるでなく、捨てるための捨てる、捨て切つて行くの捨てるの生活を甘んじて致しませう。

一つの内省は、一つの向上であり、眞の感恩の生活實行は、内省と懺悔に依つて得られるのであり其れは宗教に依り他力本願に救はれてゞあります。「寧ろ道を求めて貧賤にして死すにも無道にして富貴に生きざれ」とは大聖釋尊の金言であります。

下座合掌

辻堂の一夜……昭和八、七、一　小倉放送局より

田口省吾

只今御紹介にあづかりました通り、田口と申しまして、眞に、取るに足らない一介乞子に過ぎない沙門であります。皆さんに對し講演と申しましても――、講演がましい事はとても出來ません。只々其處らの辻堂で何かつぶやいて居るものとして御笑草に御聽捨て下さいませ。

強いて講演と申しますれば、私は私の日常生活の說明が、皆さんに對する講演とでも申しませうか。元より不徹底乍ら御笑草をもかへりみず其の一端を話させて頂きます。

一日豫約の講演を終へて宿を乞ひに或る大家を訪れました。乞食に劣るボロ衣一枚の私の生活に物貰ひか押賣りか强談判かに誤解されたか、今日は、皆留守だからと体よく斷はれた。私は、物貰に參じたのではありません、少し用事がありまして御願ひに參りましたと頼りに三拜九拜してるますと留守である筈の主人らしい人、五十に二つ三つ足りない程の威丈けな人相の人が出て見えて、聲高々に誰だ、何の用だとの事であります。そこで一夜の宿の事を話しました、主人らしい人は、いぶかしそうな顏付きで、紹介狀でもなければ出來ない、今頃は、色々な乞食が居るから油斷はならぬ、用事があれば其の筋の所へ行つたら宜いだらうと一も二もなく拒まれた。

爾來斯う言ふ事には何遍となく會つて居ますが其の都度私の修業の足りない故にと念佛合掌の外はありません。

宿はと願へば何處でもあるが、今一度御願ひして見やうと、暫らくして二度參りました。家の女中らしい人に來意を告げると、無言の儘々に去つた。暫らくして、前の主人らしい人が、青筋立てゝ又來たかと頑として聞き入れない處か、出來ないと云つたら斷じて出來ないと云ひ樣、側に在つた茶呑み茶碗をして、ピシヤリと頭から……。更に側に居た二三人の人、何んだか、遊人らしい人が此の野郎何處の馬の骨かと云ひ樣、鐵けんをして二つ三つなぐりつけられました。

私の懺悔の手は何時しか、合掌されました。御許し下さい、私の不德の至りでありました、道の足りない事だ、私が願ひに來たればこそ皆さんに、御腹を立てさせました、ごうぞ御許し下さいと、泌々御わびして歸りました、そうして一切の懺悔内省生活に入るべく自然の宿とも申しますか、人里離れた深山の辻堂を尋ねる事に決心致しました。一大美觀をなす都も、塵ほこりのたつ、あわただしい、愛の牢獄のやうである——。

山里へ〳〵と足を進めて居りますと、道通る學校歸りらしい兒童が二人、千切れ草履をはいて、私の二三間前に來ると、立ち止まつて、叮重に二人とも頭を下げて、禮をする。

田舍の百姓の子供と申せば、其れまでの事です。何んといふ、いだらしい兒童であらう、此のの乞食に等しい私に、見知らぬ旅の者に心からなる叮重な禮、思はず私も子供が過ぎさつてから、振り返へり立ち止つて、遙かに合掌致しました。

奥山に入る事、約三里でもあらうか、畫尙ほ暗きうつそう茂つた密林にたどりつきました、あたりを

さがしますけど辻堂らしい堂さへ見當りません、やうやくにして、とある小さな形許りの地藏堂を探し出しました。古新聞二三枚敷いて頭陀袋を枕に泊る事に致しました。明け易い夏の夜ではありますが、雨前の蒸し暑さと蚊の多い事とまだ夕飯を攝つて居ないための空腹で少しも眠れないのであります。時に彷徨し、時に座禪を眞似ても見るがなか〳〵に曉けさうにありません。是位の事に勝てなくて尊い祖師の御跡が踏めるか、社會のどん底に死線を越へて働いてゐる人々や失業して水を呑みて漸く生を保つ人々の事を思へば忍ばねばならぬことであります。

只國家百億の負債と思つてはなりません、私一人の負債と思はねばなりません。身心共にフラ〳〵致します駄目である。三千年前釋迦牟尼佛は七月一日でありましたか、黎明の空に白馬カンタカは靜かに太子即ち(釋尊)を乘せて城門を駈け出でた。時に惡魔は空に群つて叫ぶやう「太子よ、愚なる出家を止めて、宮殿に歸つたら七日の間に四大國を統ぶる大王となるであらふ」と太子力强く其惡魔を叱つて「魔王よ、去れよ、地上の權勢は我の欲する所でない。我はひたすらに久遠の道を得るものである」と魔王はいつか太子の心に憎惡の巢食うべき時が、到るであらうと、その時こそ我の乘ずべき機會であると太子に引き添ふて居つた。太子はやがて山に入り、愛馬の鬚を撫で乍ら「オヽカンタカよ汝の爲すべき事は終つた、いざ別れやう、決して悲しむではならぬ」と更に從者の車匿(しゃのく)を顧みて「世には心に從ふて身に從はぬものがある汝は身も心も我に從うてくれた、世の中は尊く榮ゆる者には競ひ、從ふて來るが、汝は國を棄てた貧しき我た從ふて、よくも此處まで從うて來て下れたことよ、汝の心の

殊勝さは終生に忘れぬであらう」と仰せられた。別れを惜しみ、從者に遺髪をもたせて城に歸されたのであります、そうして一介粗衣の修業者となられたのであります。それまでの歡樂の宮殿は釋尊の爲には愛の牢獄であつたでしやうと思ひます。

草木も眠る時刻と申しますか、夜は靜かに、寂として更けて行きます。今私は只一人、誰の爲に、又如何なる事を得る爲めでもなく、大自然の前に斯くなして居る事だけは宇宙大自然のみ、これを知るのみであります、暗の中より聲なき聲を聞くそれは曉を報ずる自然の聲であります。

夜は白々と明けかけたのであります、心の中が廣々となつた樣に力を得た樣であります。なんと大自然の姿は偉大な物ではありませんか一切の死の否定をいだいて如來の前にぬかづき大自然の中に托鉢さして貰ひましよう。懺悔さして貰ひませう、自然にかへらして貰ひませう、人は原始に返れば絶對に平和であります。生あるもの、死は當然であります、又眞理であります。人の力を以て動かすことの出來ないものであります、宇宙の大法則であります、人間に理智と一枚の衣をも除けば全く自然にかへるのであります。今の世界不況の行詰りも、理智と一枚の着物に行詰つて居ります。

智者何處にある。此の世の論者何處にある。父は我に着物を與へ給へり、これはよく古聖が言はれた言葉でありますが、体驗のない人々には理解の出來ない事でせうと思ひます、萬物を與へ給ふとは一切を捨てる者に依つてのみ得らるのであります。草木も自然の中に生きて居るのであります。自然の地下の水を戴く事は決して不自然なる生存競爭でないのであります、又闘ではありません。他を凌ぐのであ

りません、人類の食物も不自然なる事をなすために惠みを失するのであります。

辻堂の地藏樣に阿彌陀經の朝の勤行を誦して、堂及び附近を掃除して歸る事にして堂の椽に腰を下して居ますと、ふと目にふれたのは一匹の小さな蛇が木の枝に半身の胴を卷きつけ、何にか、前方を凝視して居ます。何にを見つめて居るだらうかと、よく見ますと一匹の青蟇を見つめて居ます。ハヽアー、ネラツテ居るなと――思ふ間もなく、青蟇の腹部は蛇の虜となりました。己れの命を保つためには斯くも、であるのでせう。否人間は其れ以上でありませう――。

辻堂に御禮の合掌をなして山を下る事に致しました。今は何處を見ても紅の葉はありませんが、緣は緣として木の葉の生命を如實に現して居ます。二三の小さな草花は、草々として、ニコ〳〵咲いて居る其のすがた、青色青光、赤色赤光、白色白光の經典の儘々であります。自然の淨土、娑婆即、寂光淨土も、悟りの世界より見る時は、間のあたりに顯現するものであります。

此の自然に還ると云ふ事は私は尤も必要だと思ひます。一日の中一寸でも自然のまゝに還り原始の氣分に返る事は有意義な事だと思ひます。だと申しましても、自然主義の自然ではありません。私が云ふ大自然とはあらねばならぬ世界を指したもので、そのあらねばならぬ自然の相は萬古不易の法則に統一されてゐる永遠の相そのものであります。その大自然に沒入し、その法則に隨從して行くの生活、その生活から湧く滾々たる泉であります。凡夫生活から脫し信ぜしめるのであります。

悲しむ者は慰められ惱みの人に道は開かれて行くのであります。凡人から淨土への道それは苦惱の連

鎖であります。そして吾々の人生とは遂にこの苦惱ではなからうかと思ひます。然し乍らその苦惱は悲しみと絶望とこの苦行ではありません。又願行の爲の自力の行ではありません。苦惱そのもの、内にこそ凡人の救はれと光明とがあるのであります。其處に即ち感謝報恩の泉が自然に湧き出るのであります。

吾々人類一切はこの苦行の姿を描き出し反省する事に依つて、いさゝかでもよき道を、たゞり得るであらうと私は深く信じます。

そして私はおぼつかないその道をよぢみ乍ら歩いて居ります。

御佛は大雲經に慚愧は衆善の衣服なりと云はれ又、四十二章經に惡ありて非を知り過を改めて善を得ば罪日に消滅して後に必ず道を得るなりと諭されてあります。

親鸞聖人の叡山に於ける生活を窺ふても眞の人間生活に目覺めんとする血みどろな惱みであつたのであります。そうしてこうこう山を下られた、そこには人間生活更生の大きい喜びがあつたのでありますそれは玉日の姫との生活として現はれ、そうして、凡人生活の姿を更に大きくなされたのであります。

だが忽にして、東の間、吉水教團が崩壞して、叡山の迫害は遂に親鸞を流人として、雪の北國に送つたのです。そこにこそ更に大きい又深い体驗と眞の宗教とが、生れたのであります。人の愛は苦であると私は思ひます。愛するものがなければ、離別も悲しみではないのであります。だが愛は苦なりとて、其の煩惱を斷ち切られやうか、あきらめられませうか、そこに更に深い悲しみがあり惱みがあります。其の生命生活への無限の進展こそは人間の歩むべき道ではないか、それに徹するところに宗教上の眞理

を見出す事が出來る、あきらめられぬ儘々に救はれて行き自然の儘々に救はれて行くのであります。

總て宗教上の眞理は吾等の日常生活中に於て求むべきであります。宗教は實現によりまして初めて其の實在の意義を有します。只單に概念としてのそれは、實現の爲の準備としての模型に過ぎぬのであります。

我々の生活をより好くするには古い道德觀念を打破して新しい道德觀に生きる事を考へねばなりません。即ち從來の日本人を支配してゐたものは主として個人關係の私的道德であつて主從、親戚、友人間のみの道德で社會人としての公德と云ふ方面は極めて微弱で殆んど顧みられない事が多く社會聯帶觀念の薄弱なために周圍の人や町村や國家に感謝する念が極めて薄弱であります。特に宗教的感情の微弱であるために感謝報恩といふ事を知りません。其の日〳〵を感謝して、樂しく暮すといふ事を知らないのであります。

三、轉身。「君止し給へ、非人乞食になつたと皆が言つて居るよ、若い時は二度とない、美味しいものを食つて美しいものを着て、すべて世の中を樂しく暮したが愉快だよ、泣いても笑つても人世は五十年だ」その内にあき風が吹くだろう、二年續いたら不思議だと笑はれて、てんで問題にされぬのみか、馬鹿扱ひにされて早や十數年——元々沙門となつて二十八年目になります。兩親に早く死別し逆境から逆境へと、かなり辛酸を、なめて參りました。

九歳にして出家し佛の末弟子となして頂きましたが寺院生活十六年は只漠然と、形式に、傳統と概念

の遊戯三昧に耽るを事として居たのです。抑も組師紙子九十年の生涯を辿るべく、出家したもの、其實際生活は只佛典と聖教を歴史的に考察するに過ぎなかつたのであります。只々學問をなし理論を研究しそして祖師の生命を繼がうとあせればあせる程、實際生活とは遠く離れて行きます。問題は如何にして祖師の跡を承繼し樣かと云ふことでありました。自己の俗情を滿足させつゝ同時に教の眞髓をも攫むといふことは絶對に不可能な事でありました。然しこの端的は所謂懸崖に、手を放つて絶後に甦るこゞであり、大死一番の境地であります。

形式的な表面ばかりの宗教生活から、内省的眞の信仰生活即懺悔の日暮しへと、沙門としての歩みに自然に轉げ出たのであります。何と言つても青二才の時のことで、世の宗教家が、其の腦漿を絞つても未だ解決（實行）のつかない大問題であります。

當時釋尊、親鸞、蓮如の諸聖人の傳記經典を持ち山中を彷徨して讀み耽けるのが何よりの樂しみでありました。

只宗派爭ひに浮身をやつして、如來の根本精神を忘却してゐるのみが出家沙門の全体ではない。一宗の存在が只他宗の排斥に由つて保たれてゐるものは最も醜い事實であります。

何れの宗派にせよ、終極は一の眞理から生れたものに他ならない。然し其れは求むる者の實行に依つて味はるゝのであります。何れの祖師も皆眞理の体得者であります。

若し宗教が其の生活に實行をなくした時は、宗教は片輪でありませう。何れの宗祖が宏大なる別莊に花鳥風月を友として、山海の珍味を求めたと云ふことがありませうか。

信仰の世界に變遷はありません。道を求むれば、求むる程、宗教生活は尊嚴そのものでなければなりません、修すれば修する程道は輝くべきであります。要は宗教の生活化にあり、教への具体化にある、宗教は一つの概念ではなく、實行と体驗とに缺げた長袖者の唱ゆる微温的な題目、統制なき其の運動、夫等は決して民衆に對しての迫力を有するとは思はれません。玉垣の奥深く神の淨域に超然たる人々、傳統と觀念の世界から一歩も踏み出し得ぬ宗教家、一通りは竝べるも實踐の伴はない思想教育家の多い事だと社會は評して居ます。今は之等の暴言に對して是非を論じたくありません。それよりも寧ろ吾々の過去の行爲を反省することにより深き意義を見出したいばかりでありました。釋尊、親鸞、蓮如の傳記も當時には泌々味はれ、最後に腦裡に殘つたのは、古聖の御跡を實行する事である。其れには「死する」ことである。一切を捨てる事である。自然に返り、原始に返る事である。今一度——。

一切人類は水面に出來た波紋の樣なものだ只人類が波紋のみに執着するから水の本体を知らない。死んだとて何物も消去るのではない、人類を救ふには自ら死することである。死することは自らの教化である。迷妄から離れることである、運命を天に任せて、そして原始、自然に、「悟れば全体が自分である」「自ら照る」其れは内省に由つて得られる。實行に由つて求められる。宗教的に再生と申します。現代の流行語の自力更生とも申しますか、死なさしていたゞきませう。……合掌

元來、眞宗教團に居る僧侶の關係上又叔父の家を繼承すべき責任の有する身の上にて、それが直ちに

一家全体の實際問題として迫りました。でも私は家を捨てる決心をしたのです「頓死をしたと思つて御許し下さい」一切の權利と義務も佛樣にお委せする事に決心して先づ一介乞子の沙門の姿、一衣一鉢主義と路頭の人となりました。丁度、時、晩秋の頃でありましたが輕がるしい草鞋の一足は今にも忘れはいたしません。今私はなるべく草履をはきますのも當時を忘れない爲めであります。

この話も今から考へますと、知人が、君を評して「田口は役者みたいな、やつだと云つてるぞ」と云はれた如く、全く狂人同樣でした。一衣一鉢の姿に成つた、私は托鉢生活に門出致しました。

各祖師の事を思へば是れ位の事は何でもなければならない事である。總べて耐えねばならぬ、忍ばねばならぬ、努力より外はないのである。世に惠まれず、四條五條の橋の下や軒下に宿る人々に比すれば忍ばねばならぬ。

山中の辻堂にて……何時しか三昧に入ると草木も眠る刻と申しますか山中遙か彼方四五十間もありませうか、一枚の木の葉がバラ〳〵と落つる物音が靜かに腦裡に意識したのであります。暫く寂靜三昧一枚の木の葉は自然に落ちる。今我は只一人、誰の爲に、又如何なる事を得る爲でもなく、大自然の前に斯く爲してゐる——。宇宙大自然のみ、是を知る。暗の中より聲なき聲を聞くそれは曉を報ずる自然の聲である——。

「暗は白々と明けかけた。」——合掌

心の中が廣々となつた樣に力を得たのです。何と大自然の姿は偉大なものでありませんか。一切の死

の否定を抱いて、如來の前に、大自然の中に、托鉢、懺悔さして貰ひませう。原始に返れば絶對に平和であります。

生あるもの、死は當然であり、又眞理であり宇宙の大法則であります。人の力を以て動かすことの出來ないものであります。人間に理智を除けば全く自然に（童心）にかへるのであり、現世は物質文明に行き詰つてゐます。

智者何處にある。此の世の論者何處にある。「父は我に萬物を與へ給へり。」

これは古聖のよく叫ばれた言葉ですが体驗のない人々には、理解の出來ない事でせう。

萬物を與へ給ふとは、一切を捨てる者に依つてのみ得られるのであります。（然しこの捨てるとは得るための捨てるでなく、捨て切つて行くの捨てるである。捨てさして戴くの捨てるである。）

草木も只自然の中に生きて居る。私は少しも草木と變ることは無い。無一物の私も草木の如く、地下の水を戴きませう。

辛ふじて一偈文を誦じて暫く默禱を續けて居たのです。

自然の地下の水を戴く事だけは、不自然なる生存競爭ではない。爭鬪ではない。人類の食物も、不自然たる事をなす爲めに、惠みを失するのである。

枯れたる木の葉の如く、熟したる木の實の如く落ちませう。

私は水のある所まで、この身を運ぶまでのことである。

やうやくにして、山を下り、こある小川のほとり迄に出たのであります。鐵鉢にて其の水を、おし載いて飲みました。やゝ力づいて更に小川をつたつて行きますこ、村端れにたどり着いたのです。ふこ見れば道端に一枚の紙片らしいものがある。よく見れば、にぎり飯を包んだものか、御飯粒が、多少こ、漬物が一切れあります。（學校歸りの兒童でも捨てたものらしい）これは拾つても、差支は無からうこ思ひ、有難く拾ひ上げました。こころが一日二日位、たつたこ見えて、多少にほひがするのです。しばらく手にして、其れを私は捨てようこしました。

まて……。

私は今一介乞子の沙門である。今は食すべき何物も持たない。餓死か。生か。

私は其の殘飯に、しばし合掌しました。其の夜も村落の辻堂に泊りました。翌日はさうも殘飯は落ちてません。導かれの儘に經を誦じつゝ田舍町を通りました。遂に夕方も近づく頃に、不思議なるか、誰か背後から呼び止める者があります。それは始めて逢ふ行商人で、そして銅貨を一文私の持つた鐵鉢に入れて合掌されるのです。その丁重な事、云はゞ乞食の私に眞心のこもつた喜捨であつたのであります何こ勿体ない事でせう。有難い事でせう。無意識に何時しか、私の掌も合はされました。何の差別もなく、爭鬪もなく、障碍もなく、悶えもなく、許されたる歡喜の世界であります。二三丁行くこ又一人の娘さんが後から追かけての喜捨であります。私は不思議な事こ考へさせられました。

又或店の前を通りますこ、一婦人が出てこられて、あなたは御夕飯は未だでせう。御遠慮は入りませんこ頻りに招ぜられます。處が「ごうぞ」こ頻りに云はれますので、何か理由のあるこだらうこ思ひ勸めらるゝ儘に家に入りました。

前年家族の人が、かりそめの病氣から死なれたらしい、その死なれた人が、非常に信仰家であつたそうです。

では御供養は戴きますけど、何かに就て、節約下されば（改善）戴きますこ佛前に讀經さして貰ふ事に約束致しました。御座敷に通され、佛前に阿彌陀經を誦し終りますこ、綺麗な御膳が座敷に運ばれてあります。

私は臺所で結構であります。こ無理に願つて、御家族の御飯を戴きました。近所の人々を誘ひ集められたのでせうか、四五十人の人が御集りになつたので、約半時間其れまでのありの儘の話を致しました

何處に行かねばならないこいふ身ではなく、夜も更けて行きます。猶も勸められるまゝにその日は、そこに泊りました。翌朝五時に起床、朝の勤めの讀經をすまして臺所に行き、バケツを貸して下さいこ申しますこ、「何をなさるのです」こ聞かれます。

掃除をさせて戴きます。

「もうそんな事はなさらないで下さい。勿体なう御座います」

「でも私が勿体なう御座います。」これが私の眞の体驗の講演です。

廣い屋敷の掃除は可なりの仕事でありました。主人が

「爾來何遍となく御寺の御說敎を聽きましたが解りません。今あなたの御話なり行ひを見させて戴きますと、丁度解脫したやうな氣分になりました。」

私は眞の宗敎生活は斯く行乞生活の中に、見出されるのではなからうかと泌々思ひました。

解脫とは！眞の宗敎生活とは！

十字街頭に、ありのまゝの自己の姿を投げ出して、始めて悟るのであります。その儘に轉げてゐるに過ぎない行乞の生活が種々と、人を導くことになるのは全く豫想外でした、人の出來ない事を、あなたはなしてゐるとよく云はれるが、古聖は皆斯くなされたのであります。やることに不思議はない。やつて出來ない事はないのであります。こゝに一切を導かして戴く光りがあり、こゝに一切を受け入れる胸が開けて參ります。

生命、其の儘が何の障碍もなく呼吸してゐる世界であります。如來の慈悲に導かれての故に、他力本願（意志）に救はれての故に。……。

此の行乞生活が眞の宗敎生活の天地であります。

王位をすてゝ行乞に出られた釋尊が二度と王位に還られなかつたのも道理であります。

戰塵の街頭は、即ち大堂伽藍その儘であり、釋尊も明日の衣食住は如何にせんと、想はれて。出家されたのではありますまい。

斯くして行くにより、多少でも、救はれて行く事は有難い事であります。

人を救ひ社會を救ふと云ふ氣持ではなく、先づ自らが懺悔內省して、道に向つて精進する氣持でなければなりません。

高い所から人を敎育してやるでなく、己れが敎育さして戴く氣持ちで、即ち敎育されて行く事の感謝の氣持ちで、あつてほしいのであります。

今日まで、御蔭で暮さして戴きました。明日の日は、どうなるやら人間の智慧では解りません。宿業その儘に追ひ廻はされて行くの原始即ち感恩の生活は終生續くでせう。

二、ボロの黑衣。 是は新モスで價格にして金七拾錢です。御覽の通り薄く衣と云ふ形のみであります。夏冬年中、ブッ通しで、眞に結構であります。人間の生活には春夏秋冬の差別はありませうが、精神の生活には夏冬の差別はありません。皆さんが冬になれば一二枚は增されるであらうと昨日の話でしたが、今既に極寒ですから本日は殊に珍らしく吹雪の日です。夏も冬も同じなのです。私が斯く話しても十人に八九人迄は信じられないと云はれます。昨年の冬でありました（四十年振り積雪五尺）九州で一番寒い雪山の阿蘇高森行脚の時でありました。夜の講演を終へてから控室で原稿、音信其他事務をなして居ると

先生御湯に御入り下さい。

はい、有難ふ御座います。後で終りに結構です。

いや皆が先生の御入りを待つて居ますからと頻りに勸められますので、暫く氣持よく浴して居ますと

誰か長い廊下を二三人の足音靜かに〳〵湯殿の方にやつて來るのです。

變だな――、脊中を流して上げませうなら、ごし〳〵來られるのに、不思議でたまらないよもや、無一物の私の事に手の長い人ではない樣です。脫衣場の箱の邊にて足が止つたのです。益々不可思議千萬であります。其足音は右とも左ともしない暫くピシリとも。湯殿の入口のドアーの上部に一尺四方のガラスがはめてあります。私變に思ふて覗いて見ますと豈にはからず、私の着てゐるこの一枚のボロ衣を果して一枚なりやと調べて居られるのです。電燈ですかして迄。

私冷りと致しました。無い物は無い有る物は有ります。天知る地知る我知る汝知る。下手な事は出來ない――。下からでも見へない樣に着て居たら如何でしたでせう。隨分、今日迄の中に、脊中丈でも眞綿のチョッキを着ては――、新聞をはさんでは――人が氣違い坊主と云ふからと大分勸められて來ました。身体が大事である。若しあなたが、身に若しもの事があれば一大事であるから、自宅に歸へつてから丈でも普通の着物に着替へてと言はれました。何枚となく縫つてからならば着るだらうと新調をされたけど、無駄となりました。今日寒さに慄へ飢餓線上に喘ぐ人々の事を思へば、實際私一人如何うして溫くして居られませうか。貧乏するは運命だ――天罰だ――と捨て、仕舞へばそれ迄の事です。

私には是以上の必要がないから着ない丈の事です。然し此の一枚に等しき單衣を八九十の御老人に又大臣樣にも召しなさいとは申しません。若し私が女性であつて職業女優でもありましたら、現在の田口でも白粉紅をつけるでせう。要は其人其人各人の使命境遇立場立場に依る事であります。殊に私等は古

聖の傳記や歷史を說明し、且押賣りする事のみが(自己生活は省みず)御說敎ではありますまいもの、御寺での說敎は學校での歷史の講義とは少々違います。私が斯くなして居る事に依つて私を知られる多くの人の實生活に波紋して行き、改善が理論を破壞して實際問題と表はれて參りますと思へば、私一人が犧牲になる位の事は寧ろ仕合と思ひます。時は非常時であります。非常時と戰ふには非常時を以て當らなければなりません。(今更私は斯くなつたのではありませんけど)。要するに人間の顏には着物は着ませんから如何なる千萬長者の令孃にしても人は自然の大空に同化してゆけば裸体で結構です。然し人間には禮儀があり國には法律がありますから、私は僧侶としての關係上衣を着て居ます。要は、らしくする事です。

先生の生活は不自然だと時々云はれますが、人間の顏(衣服)には春夏秋冬はありませんもの……。皆さん今國家に六十億の負債があることを考へますと、吾等八千萬の國民は負債の衣服を着て居る事になります。假りに平常に着て居る着物を最低壹圓(一枚)としますと十枚着る人は拾圓になる。其の内八枚の八圓は負債かも知れません。八圓は拾六圓、拾六圓は參拾貳圓、六拾四圓と倍して行きます。六拾億は百貳拾億の思想惡化國難となつて來ました溺れる者は藁でもつかむが今日であります。今假りに日本九千萬人の同胞が一枚の着物を脫ぐと(國家のために)九千萬圓の金が節約出來ます。

此精神を以て國家の爲めに努力したなら五拾億や六拾億の負債は何でもない。一日二日に解決がつくと思ひます。

只外面のみの向上(内心の拔けた)は、上つて居ると思ふて居る間に早や下つてる。今日(行詰つて)であります。下つて下つて、土下座〳〵して謙遜に、しなやかに、行く事は結局は上座の生活であります。下がるとは上るための下がるでなく、下がるための下がるであります、得る爲の捨てるでなく、捨てるための捨てる、捨て切つて捨て切つて行き、捨てさして戴く感謝の氣持の捨てるであります。

着る爲の脫ぐ事でなく、らしく脫ぎ切つて行き、行けば行く程私は着て居ます。

溫いと云ふ精神の着物を年中、寒暑を不問ず單衣一枚のボロで結構と云ふ感謝を着さしていたゞいて居ます。本來無一物にかへれば即無盡藏であります。

一人の父が其の子供(福岡縣立中學生)を呼んで「この福岡日日新聞を見て見よ、田口と云ふ人は今福岡に來て各種團体に講演中だが、此の寒中に只一枚の生活、國家のために努力して、居られる、今頃の學生は、昔とは違つて困る、おまへも、今少し學生らしく、ならなければなりません。」

田口と云ふ人は、御父上樣、既に先月、學校に見へて、御話しがありましたよ。私は、もう、遠くから、直ちに一枚づゝ、次第〳〵に、脫ひで居ます。段々とそれでか近頃は學問も出來るし、身体も壯健になつたやうに、なりましたと。

田口先生は實際足袋も帽子も御持ちになりませんでした。今日から私の部屋丈でも掃除を致します。御母さん、箒は何處にありますか。

四、商人宿托鉢

或る夜のこと、一夜の宿を求むべく木賃宿の戸を叩いた事がある。「深夜誠にすみませんが私は旅僧で御座います。今夜一晩御宿を願います。」既にやすんでゐたと見えて直ぐには答もなかつたが漸くに眼を覺ましたらしい。「御宿ですか、何人さんですか」。「二人です。」「お二人なら御氣の毒ですが室がありません。」「そうですか、誠にすみませんが上り口でも結構ですが何んとか御願いたします。」「一晩丈ですか、」「はい都合では二晩か三晩になるかも知れません」。漸くに交渉が出來きて戸を開けて吳れたのは、見るからに、デツクリ肥えた五十歳前後の此家のお内儀らしい。眼をこすり乍らいぶかしそうな顏附きで、「お這入り下さい」。這入つて見ると、成程室がないと言はれた丈あつて摺切下駄や草鞋などが限りなく脫ぎすて、ある。賣品らしい箒、應接臺、蝙蝠傘の張替道具、鍼灸で拵らへたお茶屋さんの鑵などが所狹き迄に置かれてある。「もう遲いですから早速休ませて戴きます」。「一寸御待ち下さい。御茶一杯上げませう。旅僧さん達は餘程今日はおそく迄托鉢なさつて大分貰ひなさつたでせう。道でも迷はれたのですか。」「と云ふ譯でもありませんが、おそくなつてすみまんでした。」宿帳に規定の記入を終へて二階に通されて見れば一番端の部屋に琵琶彈さんが琵琶を枕元に生活戰線の旅の疲れか他愛なく寢込んで居る。各々自己の職業に依つてその服裝は違つて居るが生きんとするもの、赤裸々の姿を投げ出して居る。人は各自の職業に意義と光りを失した場合には[illegible]の生命はなくなるのでありませう。殊に吾等に於いて然りだと深く懺悔させられた。

今日一日働かして貰つた事を如來に感謝して寢床に就く。翌日は降りそうにもなかつた天候が俄かに

變つたと見へて眼を醒まして見ると、しよぼ〳〵と雨が降つて居る。如斯き階級の人に依つては、雨は最も嫌はれて居るものです。所謂る一日の死活問題に關するからである。皆さんの愚痴と來たらとても御話にならぬ。ごろ〳〵寢て許りもゐられないので各自の評議會[illegible]開くから出席せよと勸められるがまゝに末席を汚す。先づ座長席に應接臺を商ふ四十四五歳位の人が着いて評論の火蓋を切る。「近頃の不景氣はお話になりません。私は三日の中に漸く應接臺一臺を賣りました利益と來たら一臺賣つて宿の一日の宿料位なのです。國を出る時貳拾四五圓位の元金を調達して來ました。夫も私に信用があつて證書一枚で貸して貰へたのなら、まだしもたが、夫婦の着物を一六銀行に曲げ込んでの調達だからお話しになりません。夫が殆んど毎日喰ひ込みの始末です。此儘家に歸つたら、妻君に何と言はれるか、歸りには反物の一反位は土產にと心待ちして居らうが、今では土產處ではない。歸りには旅費もむつかしい位です。全く弱つて居ります。」其次に口を開いたのが私達と同じ部屋の琵琶ひきさん。「私は生れたときから多少目を惡くしてゐたのですが、琵琶彈きになつて、今年が八年目になります。今の人が御話の樣に、昨今の不景氣は例へ樣もない位です。昨日一生懸命に廻りましたが、全收入驚く勿れ十七錢です。大枚一錢の御供養も五軒に一軒が平均です。毎日聲を使ひますので近頃は咽喉を惡くして、おまけに風邪迄引いて困まつて居ます。一日ピコ〳〵やらなければ一日の命がつながりません。親兄弟には皆死に別れました。今では全く賴るみよりもない獨り者ですが、孤兒院に這入るには年が多過ぎるし、養老院にははるかに年が足りません。世の中の不幸は私一人が背負つてゐると思ひます。皆さんも、どうぞ憐

れと思召して應分の御志を願ひます。」中々此琵琶彈さん拔け目がない。第三番に立つたのがお茶屋さんです。「私元俥屋でありました。御承知の通り世の中と云ふものは、凡てが文明々々と喜んで居ますが、文明といふものは人間を見殺にするものです。自動車と云ふものは何處の毛唐の發明したものか知りませんが、私達にとつては敵です。娘を賣つた血の出る樣な金で買ひ求めた俥も賣り拂ふ段になると貳拾圓足る足らずです。近頃は終日駐車場で、客足許り氣をつけて居ましても、一回か二回位が關の山です。或日の如きは夕方迄一度もお客がなく、斯んな時に限つて間の惡いものです。一寸俥屋さんとやつて來るので、締めたと思ふて出て見ると、すみませんがA町はこれから何處ち行けばよいのですかと來る。どなり返してやりたいやうに、腹も立ちますが仕方ありません。夫れに比べると昔は豪勢なものでした。一日に五回も六回も走つて四五圓位の金は譯無く儲けて居ました。夫れを胴卷に入れて歸ると例のを二三本と樂しみに思ひつゝ歸りを急いで居ると、俥屋さんと又呼び止められる。けれども今は全く夢の樣です。毎日俥を見て居るさへが心の氣づまりになるので、一思ひに先日賣拂ふて仕舞ひました夫れを資本に田舍のお茶賣りでもと始めましたが、中々賣れません。是から先、如何なる事やら見當がつきません。」夫れも是もが不景氣をかこつ許り。第四番を承るものが洋傘の張替屋。「私は元相當の傘屋を經營して居ましたが、自業自得とでも申しませうか好景氣時代に遊び方のはげしかつたために失敗して仕舞ひ、今日は見る蔭もない傘の張り替へです。玆五年程前後は張り替も修繕も相當にありましたが減りました。今では一合の酒は愚か、五勺の燒酎にもありつけません。年許りとつて實際困ります

人は若い時が大切です。馬鹿な眞似をするものではありません。今に後悔する時が來ます。」次に私の番です。「私は番外にして下さい。御話申上るす丈の材料もありません。」すると應接臺賣りが「托鉢屋さん、無い事はないでせう。是非お話下さい。あなたはお坊さんらしいから說敎でも如何です。私達はまだ、お寺詣りなごした事はありません。今日はよい時です。是非聽かして下さい。」と强いられる。「夫れでは皆さんの前に私の生活の一端を話させて戴きませう。皆さんの今迄の御話は、私にとつて眞によい敎訓でありました。御禮申します。又現在の皆さんは幸福です。仕合せです。人間は與へられた其日々々を仕事に生きると云ふ事が最も必要であります。職業に絕對差別はありません。皆さんは、よく總てを投げ出されました。私は、元在家でしたが、故あつて出家をしました。けれども、寺院殿堂での出家の生活は、私等の如き罪の子は勿体ない事です。其處で御覽の通りの托鉢生活、即街頭への生活に出たのです。街頭での生活は、眞に尊いものであります。然し此の生活には色々の事が起ります。辱められる事も何遍となくあります。皆さんも左樣でせう。今日はお斷りしますと頭から聲高にやられる時は、實際腹の蟲がグィ〳〵致します。然し其時は心の中で念佛を申し合掌して居ますと一寸靜かな心に立ち歸る事が出來ます。人の怒りは私の怒りである。眞にすみませんと私は何時も心の中で、お詫び致します。或日の事です。朝から乞食坊主が來てケチが惡い。坊主々々斷るとやられた事があります。是れ以て私の不德の至りだと、私は立場、所を替へて居りますと不思議にも、叱りつけた其人が、子供を介してではありましたが、若干の金子を紙に包んで、私の持つて居る鐵鉢に喜捨して下さいました事

があります。皆さん。私の托鉢は物を貰ふと云ふ事が第一義では無く、お互に如來の光に接し明るい生活をさせて戴くと云ふのが托鉢の主旨であります。皆さんは皆さんで現在の意義ある生活に光りを求めると云ふ事が最も大切なもので、是は申す迄もなく、信仰の道に這入る事に依り救はるべきものと私は信じます。終りにつまらない私の話を聞いて下さつた事を御禮申します。

先生は田口さんではありませんか、はい田口であります。まー、こんな所で御目にかゝるとは夢にも思ひませんでしたと、隅の方に居られた、虛無僧さんが、突然と、實は先生の御話しは北九州で聞きました。先生は、こんな商人宿の乞食宿に來られやうとは、又御會ひしやうとは夢です〳〵〳〵……。一座の人々、先生尙今少し御話しを是非にと云はれますので、二三十分致しました。先生今から私等も、絕對に記念にこれから煙草も燒酎も止めます、實際此のごん底生活に喘ぎながら人生の何ものかゞ解りませんでしたと、心から懺悔致します、且つ其れを實行致しますと、座長格の應接臺賣屋さんの答辭でありました。午後は雨も止み半日でも遊ぶは勿体ない——實行だ〳〵〳〵皆さん各自の行商に出て行かれる、其の姿に思はず、私、合掌致しました、宿主に若干——、殘りは皆さんが歸つたら、豆腐の糟合でも、なして馳走して上げて下さいと喜捨して避間致しました。

五、辻　堂　托　鉢

夜分の講演を終へた私、一寸今夜は去る所へ、行つて來ますからと、寺族の方へ告げると、今夜つて今から何處へ行かれるのですか。はい、あの明朝は早く歸りますから。夫では宿るのですか、はいそう

です。寺族の方變んな顏付きで頻りに、其行塲所を聞かれるのです。（貴男もやはり若いので）。別に用事もありませんけど若し電報でも來ました時に困りますから――と聞かれるので、止むなく辻堂の事を話しました。まあ此寒中に何にも召されずに。はい何に馴れて居ますから。でも御寒いでせう。せめて毛布丈でも御持ち下さい。はい御親切は有難いですが、其御親切を只荷物として、持つてゆきましても何卒心配なさらないで下さい。……と合掌し（御親切に對して）

此附近に辻堂はありませんかと、通り掛りの人に尋ねましたら、提灯をさして、頻りに私の顏を見られます。夜中に誰れかと思はれてか、多少蒼ざめた顏付きで後ろに退りぞきつゝ、やつとの事に、ついに其處に若宮神社がありますと云はれて小走りに行かれます。神社としては可なりの宮である。拜殿に詣で見れば、猥りに入るべからずの貼り紙に、仕方なく困つて居ましたら、一軒の社司宅とでも申しますか、茅屋があります。夜中の事に恐入りますが、御願ひ致します。拜殿の板敷に休まれるのですか、はい。貴郎が？して何處から來たのです？はい各地を行脚して居ます旅僧であります。辻堂に寢さして貰ふ事が、私の信仰生活であり、宗教生活（他に向つての）であります。夫では、拜殿に、莚がありますから、夫でも敷いて御寢みなさい。有難ふ御座います。合掌

何時しか二三時間も眠りましたか、多少寒氣を覺へ、眼を醒しますと、早や、東の空が白んで居ます洗面をなさうと、思ひますけど、水がありませんので、附近の小川に行つて、洗面をすまし、御神殿に向つて、朝の勤行に、佛說阿彌陀經を誦しました。神社に於いて、僧侶が經を讀誦するに、何の不思議はありますまい。明治維新前後迄には神樣の御幸の時には、神前に、佛說阿彌陀經を、誦して後に、神体の御出社と聞かされて居る。「伊勢の本地を尋ぬれば、元は阿彌陀如來なりけり」とは誰れかが、詠じたものである。何か御禮にと思ひまして、古箒を漸く、見附出し境内を掃除して居ますと（心の汚れ塵を拂ひ除くと云ふ意味にて）、二三人の朝詣りでも申しますか、禮拜されては、變な顏附きで、振り返へり〳〵見てゆかれる。終りし頃、社司宅の雨戸が、ガラ〳〵音がした。御禮の挨拶にと思ひ訪れると、宮司らしい人が頻りに御茶一杯と、御親切に言はれ、辭退しますけど、頻りに後を追ふて見えますので、親切を斷るのも却つて無禮と思ひ、通される儘に、座敷に行つたら、勿体ない樣に、茶、菓子座蒲團と、用意されてあります。氣の毒に思ふて隅の方に、座して居ますと、サア〳〵床の間の方にと言はれます。然し結構ですと辭退しました。貴郎は、如何うした氣持ちで、宮や辻堂に寢まれますか？別に、如何してと云ふ理由はありませんけど、由來宗教家と云ふ程でもありませんが、道の者たる者の本分は、宗教的生活とは、一切の自我を滅却したる生活であります。私は此の新（眞）生活に、入らして貰ひました第一歩の辻堂を、永遠に忘れ無い樣に、又信仰心の繼續とも申しますか、宿らして居ります。愚な、未熟な、不德な、不規律な、邪見な、怠惰になり易い、驕慢心に落入り易い私は、斯くした事に依つて求道心を、呼び起さして貰ひます。眠れる私を、虛僞な罪の子を又人は常に總ての道人と、相通ずるの覺悟がなければなりません。教育家も、宗教家も、警察官も、神官も、僧侶も、倶に共に、一丸となつて連帶責任の下に、社會の第一線に立つ丈の勇氣が欲しいのです。社會教化とは、自己の修養、

即教化でなければなりません。教化すると云ふ、高い所からの折衿式でなく、低い所から教化されて俱に行くと云ふ氣持ちで即自らの體驗其もの、說明が、教化講演(例せば)であつて欲しいのですから。全く同感です。(力强く)社會は實行を要求して居ます。理論の世界は既に過ぎました。然し其實行は出來ません。貴郎は偉い人です。着々夫れを實行されて居られるのですから。別に偉くも何にもありません。當り前です。と種々話して、朝飯まで馳走になり歸りました。

終りに、生活からして、感謝さして戴く、事業の一端を、申し上げさして戴き、結論に近づきませう社會事業の內容を申上げたいけれど時間に限りがありますから今日は畧します。

私がよく、托鉢をやりますので、君は如何して托鉢をしますかと、よく聞かれます。今から

六、托鉢の話

即托鉢の事に就いて、述べさして戴きます。托鉢の實踐的過程は後廻にして、其の頭陀即托鉢の理論的說明を申します。頭陀と云へば、御承知の方もありませうが、私共が日常使つて居る頭陀袋の頭陀の事であります。併し此の頭陀と云ふ事に、種々な意義が、籠つて居りますので、在家の方も心得て置いて、大變爲めになる事と思ひます。

頭陀即托鉢と云ふ事は、勿論印度の言葉でありますが、支那の言葉に直しますと、修治と云ふ事になります。又抖擻といふことにもなります。そこで頭陀、即托鉢は、今云ふ通り修治、抖擻と譯します。修治とは、文字の如く、心を修め治めると云ふ意味になります。ですから托鉢と云ふ事は、修養して行

くと云ふ譯になり、夫を今日では托鉢すると申すと只物貰ひが全体の如くに誤解されて居ます。又頭陀と云ふのは、淘汰と云ふ意味にもなります。此の抖擻修治と云ふことは、大變に良い事であります。今日は此の托鉢、即修養、忍辱の事に就て充分御相談さして見たいと思ひます。修治と云ふことは前にも申しましたが、抖擻淘汰と云ふことは、形容すると物を打拂ふと云ふこと、塵芥を捨るが如く、心の塵を淘汰するといふのが即抖擻であります。詩の中に「胸中三斗の塵を抖擻する」といふ語があります。胸一杯に持つて居る心の中の慾望の塵をば、佛教の專門語で申しますと、貪慾、瞋恚、愚痴の是等苦惱の根源である煩惱の塵を抖擻する、即ち打拂ふといふ意味になります。例へば、夜半に雨を聽いて居る時の如き、蕭々たる靜けさの中に、總ての浮世の是非善惡や、妄想、無念、苦惱、其等厄介な心欲を打拂つて宇宙の大自然と融合して、何んとも云へぬ、すが〳〵しい心持となるといふ意味が此の中に含まれて居ます。是れが頭陀、即托鉢と云ふ事であります。要するに、体驗のない人には、判り兼ねるかも知れませんが、洵に落ち附いた氣持です。從來托鉢と申しますと、禪宗の雲水の方でないとやらないかの如く申しますが、僧侶となつた人々は、誰でも一度位實行したら眞に良い事と思ひます。一度死線を越えて見なければ、眞の宗教の切れ味は解りません。私が曾つて、さる坊樣に如何ですか、一緒に私と托鉢をなされてはと、勸めた事がありますが、君市內では恥しくて出來るものか、知人の居らない郡部でもあつたら旅の恥はかき棄てといふ事もあるが若し托鉢をして見給へ、宅の坊守(妻君)は早速に里方に歸つて了はうとの事でした。

托鉢は出家沙門の使命であり、生命でありますが、實行こなるこ容易に出來るものでありません。私なごでも、今日では容易い事ですが、此生活になるには、數年間考へさせられたものです。然しこの心の抖擻即托鉢を始めからその氣になつて掛るのこ、事に當つてから始めて氣がつくのこは、大變に違います。凡そ人間こ云ふものは、心の中に、何の蟠りもなく、清く平かな氣持になつた時が、一番仕合せであります。是位天下泰平な時はありません。衣を千仞の丘に振るが如く、足を萬里の流れに洗ふが如き、愉快な氣持で何時も暮して居たいものであります。凡て世の中の事を、是ではならぬ、あれではならぬこ心配して見た處で、太陽が西から出る譯でもなく、何時でも太陽は東から出るに決つて居ります で常に、望む可からざるものは望まず、思ふ可からざるものは、思ひさへしなかつたら、必ず氣樂に日暮しが出來るのであります。

「一物を增せば一累を增す。」一つの物が殖えれば一つの累が殖へるこいふここは、私は常に話して居ますが、實に是れは、解り易い道理であります。即一つの物が殖へれば、一つづゝ、心配も殖へる。多くの人を使用して居る人は、胡坐をかいて座つて居ても、奉公人がして呉れるから氣樂だこ云ふのは、大變間違で心配は益々多くなるこ云ふ事が事實です。新婚當時の如く、夫婦二人ぎりの時は、氣樂です。子供の二人三人こふへて來るこ心配苦勞は一通りではありません。金が溜つても其の通り、「一物を增せば一累を增す」であります。人類學者の書いたものを見ますこ、人間も始めから着物を着て居たものではないそうです。獸同樣に毛が生えて居て裸体で居たのだそうです。今でも、南洋方面の土人は裸体で居ります。處が段々に、着物を着る樣になり、下駄を履き、頭には帽子を冠り、夫丈でなく、冬になるこ防寒具、即マントや袷卷をする樣になりました。斯くして、贅澤な事になつてくるこ、又夫々心配も、嵩まつて來ます。イヤ流行が如何うだ、斯んな着物は人が笑ふの、此下駄は低いから駄目だこか、帽子も舊式で見苦しいこか、まるで流行の尖端を爭ふて居る樣なものです。夏になるこ、夕立が多くなりますが、夏帽子を一度雨に打たせたが最後、棚から下した古帽子の樣になるの、中には帽子を手に持つて走つて居る人があります。是れでは帽子は頭に冠るのやら手に冠るのやら、解らないのであります私は、御蔭で炎熱燒くが如き夏の日でも、寒冷身を凍らするが如き冬の日でも、帽子を冠つた事がないのです。又夏扇子、日傘等所有致しません、御覽の通り風邪一つ患はずに壯健にして居ます。風邪こいふものは厚着をして居る者程かゝり易い樣です。處で、今日の敎育は勿論、文化の世の中で、智識萬能主義で結構ですが、願くは、今少しは手を出して働く人を出して欲しいものこ思ひます。先日或る縣立中學校に講演に參りましたら、今日迄敎育の方針は餘りに智的方面にのみ流れて、實行こいふ事には乏しい。最近學校に、種々の問題が起るのは、學校、生徒相互の罪で、是は從來の敎育方針を根本から改めねば駄目だこ、頻りに話されました。成程一理ある事こ思ひます。話が横道になりましたが、今御互が、心中に煩悶して居るのは何の爲かこ自分に尋ねますこ、すべて慾望を逞ふして居る結果であります夫れも正しき道の望であり、自己の力の行ひ得る程度のものならば結構ですが、心を二つに傷りを以て刹那々々を誤魔化し行かうこする處に煩悶が起ります。實際私等が夫れであつたのであります。今此の

懺悔の生活に入つて見ると、自分乍ら、その時の事に愛想がつきるのです。

社會を、人を、己を、神を、佛を常に僞りつゝあるのが、現在の自己の姿でありませんか。凡て人間の生活は虛僞です。不完全です。完全の世界に一歩々々進みませう。一つ宛不相當な慾望を抖擻して行つたならば、從つて氣樂に暮せる道理です。即ち「一物を減ずれば一累を減ず」といふ事になります。

古聖の方々が、よく頭陀をされた事を、深く考へて見ますと、私共は實際にお恥かしくて口にも出せない程慚愧に思ふことが澤山あります。私達の現在の生活は、其の眞似事に、過ぎないのであります。

古の祖師方が、頭陀行即托鉢を以て、終世艱難辛苦、心の妄想を抖擻せられた數々の傳記を、拜誦して見ると、全く涙が出ます。

妄想を抖擻する許りでなく、凡ての慾望を抖擻し盡くして居られるのであります。慾望とは不正なる我慾であります。皆さんも心の中に何か持つて居りませう。眞に胸中に、一點の慾念もなく、苦惱もなく、考へる事もない人は、恐らくありますまい。胸中三寸の塵位ではないのです。自慢、高慢は萬人の通有性でせう。一つ宛て減らして行つて一累を減らしませう。物事は思ひ考へ樣で如何でもなると思ひます。現在私は、今書齋とでもいふべき部屋は以前便所でありました。と申しますのは、建築する時に炊事場と餘りに、接近してゐた爲に、最近便所を他に移したのです。で其の跡を、空にして置くのも惜しいので綺麗に消毒して私の書齋にした譯です。夫れで書見をしたり、筆をとつたりしてゐますが別に精神が狂つたと云ふ譯でもありません。何事も不自由を感じないと云ふ心懸けが大事です。お櫃がこれ

丈、皿が何枚、鍋が幾つなければ、暮しがつかぬと云ふ譯はありません。無ければ無いですむものです夫婦の間でも、茶椀が一つしかなかつたら亭主が先に食べて、妻君が後から頂戴したら宜い譯です。國家、社會、全家族、全人數が絶對的と云ふ意味では無いが、常に其心懸けが必要です。前にも申しました樣に、品物が少ければ、却つて厄介でも無く、心配もなし、又夫れ丈け罪を作らんで濟むのです。今日高位高官の人々が、何の爲めか知りませんが、立派な別莊を構え、贅澤三昧に耽つてゐますが眞意が解りません。(其の癖に稅金等はなるべく少く納める工夫のみなして)

御佛は言はれました。「我物に非れば取るべからず。」人の家でも自分の家でも何時どんな事になるか解りません。つまり自分のもので自分のものでない道理です。考へて見ると、人間の身体も、その通りで全く自分のものであつて自分のものでありません。

一度無情の風來りぬれば、死んで行かねばならぬ身です。我といふものは、無い事です。佛陀も斯く覺られたのであります。限りある自己を捨てゝしまへば、無限絶對の宇宙乾坤と同化する事が出來、心中一點の蟠りもなく廣々として來ませう。陽明學では、此境地を天と云ひ、大氣と申します。是れ位大きな財産はないのであります。人間の財産は有限です。大氣の限りなき財寶に比べますと、極めて小さな一つに過ぎぬではありませんか。次に私が經營して居ます社會事業の一端、醫療事業に或る時、某旅團長の宅から供養喜捨の惠みがありましたので、その報謝、即私の主義生活を歩まして戴く意味に於いて、旅團長邸の草取り(托鉢)に行つた事があります。廣々とした庭園ですが、閣下の宅として綺麗に掃

除が行き屆いて草もこつてあり、左程仕事はありません。然しその取つてある草が皆根から引いてあるのではなく、只摘み切つてあるに過ぎないので、それを一本々々根から引き拔いて居ますこ、二月の中頃こ云ふに、雪がチラ〳〵こ降つて來ました。午頃になりますこ御夫人が、「田口さん、お止しなさいもう結構です。御晝食でもお食べ下さい」こ頼りに勸められます。辭退するのも却つて惡いこ、お言葉に甘へて無理に臺所で御馳走になりました。そのあこで、先日の喜捨の御心持ち、即心情こも云ふべき事をお尋ねしましたらそんな事は聞かないで下さいこ申されましたが、遂に御話になりました。「あれは、丁度師走でした。お正月が來るので、何か衿でもこ思ひまして、出掛け樣こしますこ、あなたが門前を讀經しつゝ、托鉢して通られました。田口こ云ふ人は救濟事業の爲めに、街頭に立たれて托鉢して居るのである。洵にすみませんこ思ひました。私も娘の時であつたら美しい衿も欲しからうが、四十を越へた今では、古いのを洗濯すれば結構です。節約しませう。そして世に惠れない氣の毒な人々の爲に、病氣をしても一服の藥も戴けない人々の爲に、供養さして貰ひませうこ氣附きましたので、あなたの處に持つて參りました。」この事に私は思はず合掌しました。夫から私は掃除をしました。

便所の附近は、矢張り左程綺麗でなく、草も可なりありました。四時頃になつて、だしぬけに、作業中止の聲がかゝりました。夫は嘗て、千軍萬馬の中を往來された旅團長閣下なのでした。

「相變らず精進して居るね。」

「閣下只今、乞子は、讀經中であります。」

「もう君の草一本々々は、經典の一字々々に相當するだらうね。」

流石は詩將軍こして、嘗つて、

明治大帝の御意にこまりし人こはいへ、禪學其他あらゆる經典に精進した人だけに、うがつた事を云はれるこ思ひました。

「まあ、努力し給へ。」

其日は夕方迄、托鉢させて戴き、御蔭で今日一日は汗で働かして貰ひました。人事を盡さして貰ひましたこ、御禮を申し邸を辭した事がありました。

托鉢は、私の實生活であります。まだ、種々こ述べたいけど、餘り長くなるので、今日は是れ位で止さしていたゞきます。

以上、千切れ〳〵の話に、眞に御聞き惡くあつたでせう。

皆さん。此の宗敎生活は、周圍から見るのこ、內部から味ふのこは、天地の差があります。內面に於いて、（實行）の充實性を非常に感ずるのであります。

今日、それ自力更生、生活改善、政治に、經濟に、敎育に、宗敎に、國際に、外交に、行き詰つた問題に對して、此の生活の切れ味の實用向きなる事は、やればやる程、積極的に出て來るものであります此氣持でゆけば、凡てに解決がつかない事はありません。時代は、餘りに只形式許りに、まだ〳〵こらはれて居る樣に思はれます。

今頃、私等の事業部醫療所では、惠まれない多くの人が、主任醫の慈光の下に依りて、苦しみの病から癒されて居る事でせう。私は御蔭で皆さんの前で今日一日語らひをさして戴きました。

佛陀が、法句經に言はれました金言に、

「寧ろ、道を求めて、貧賤にして死すとも、無道にして、富貴に生きざれ！」

一切を合掌してゆくの生活、叩かれてゆくの生活、下下座してゆくの生活、婆婆即寂光淨土の生活、無限の生命へと往生さして戴くの生活！自然の無所有、無一物にかへるの生活、童心にかへるの生活！あまんじて致しませう。

佛說法句經言く

「寧ろ道を求めて貧賤にして死すとも無道にして富貴に生きざれ。」

佛說大雲經言く

「慚愧は衆善の衣服なり。」

九州地方講演行脚

（昭和八年一月ヨリ　但シ主ナル團体ノミ）

一、官　公　衙

福岡縣市當局、福岡日日新聞社聯合、於市記念館一般講演會。小倉市役所主催爲吏員。若松市教育會主催爲學校職員、於市公會堂。大牟田市役所主催於市公會堂爲一般。若松市聯合主婦會同女子青年團聯合主催一、於市公會堂二、若松校三、藤木校四、島郷校。福岡箱崎町役場、同信用組合主催於公會堂一般講演。飯塚市主催聯合主婦大會—二日間四回。久留米市役所主催爲市吏員於市議事堂。宮崎市役所、都城市役所。

一、警　察　署

福岡市警察署。門司市警察署。戸畑市警察署、若松市警察署。大牟田市警察署。門司水上警察署。福岡刑務所。小倉刑務所。久留米警察署。飯塚警察署。

一、ラジオ放送講演

福岡放送局ヨリ。八・一・三〇。小倉放送局ヨリ。八・七・一。

一、學　校

官立福岡高等學校。福岡女子專門學校。縣立福岡中學。縣立福岡高女。筑紫高女。縣立福岡農業。縣立若松中學。縣立若松高女。大牟田三井工業學校。縣立鹿兒島出水高女。縣立福岡田川高女。熊本縣立天草中學。鹿兒島市立商業。同鶴嶺高女。

一、銀　行　團

鹿兒島市全銀行聯合於商工會議所。安田銀行。安田貯蓄銀行。安田生命保險會社。十七銀行本店。三

池貯蓄銀行。

一、工場、炭礦業所

八幡製鐵所。同二瀬出張所—五日間。住友炭礦忠隈鑛業所（飯塚市）。三井炭礦山野鑛業所—三日間（飯塚）。三井炭礦田川鑛業所—三日間（後藤寺）。古河鑛業株式會社—三日間（下山田）。大日本製糖株式會社（博多）。渡邊鐵工所（博多）。福岡地方專賣局。三井三池鑛業所（大牟田三回）。大日本麥酒株式會社（門司大里）。飯塚鑛業所（飯塚三回）。三菱鑛業株式會社筑豐鑛業所（直方）。新入炭坑。鮫田炭坑會社（門司大里）。旭硝子株式會社（八幡）櫻麥酒株式會社（門司大里）。明治鑛業株式會社豐國鑛業所。日本足袋株式會社（久留米）。貝島炭坑株式會社大之浦鑛業所（直方）。鹿兒島專賣局。三菱長崎造船所。山形屋百貨店員團。長崎—松島炭坑、長崎—高島、崎戸炭坑、（三井）

一、券番、遊廓、料理屋

水茶屋檢番（福岡）。博多檢番（博多）。柳町檢番（福岡）。大牟田愛券番（大牟田）。小倉町旭券番（小倉）。戸畑券番（戸畑）。新柳町貸座敷組合（博多）。福岡女給組合大牟田酌婦組合。直方遊廓。大牟田遊廓。旭遊廓（小倉）。都城貸席組合。

書信の中より

□

大牟田市聯合主婦會より

拜啓餘寒未難去候得共益々御清穆奉賀候扨過日ハ當主婦會ノ爲御多用中繰合セ御來牟ヲ忝フシ眞摯ナル御體驗談ヲ拜承シ一同感激措ク能ハザル處ニ御座候以御蔭本總會ハ行事盛大ニ且ツ有意義ニ終了致候段深ク感謝ニ不堪候茲ニ乍延引御挨拶申述度如斯ニ候　敬具

□

第〇〇旅團長夫人より

昨朝は御多忙の中を態々地方よりかへつてから御訪問下され御芳志誠に難有く厚く御禮を申げます其節何は置きても御目にかゝるべきをその前夜あまりに夜ふかしのため取り亂し居り心にもなき失禮を致してしまひました。何卒御免し下さいます樣御願ひ申上げます。扨此度はいよ〳〵皆樣ども御別ども相成りました。永々の間御親切に遊ばして戴きました事、いつ迄も忘れ得ぬ事で御座います。未乍ら御見捨てなく御願ひ申上げます。又御目もじの折もあるのでせう。御上京遊された折には何卒御尋ね下さいまし。何卒御身を大切に遊ばされて此上乍ら國家の爲め社會の爲め御働き下さいます樣吳々御願ひ申上げます。これは誠に私の心許りの金子失禮ども存じますが、あなたの御事業のたしにでも出來ますならば幸ひと存じます。では是にて御別れ致します。御身御大切に遊ばされませ。先は取急ぎ失禮乍らかしこ

△　△　子

□

某女學校教諭より來れる

一別以來一度の御便りも致しませず本當に失禮致しました。あの寒い折柄先生には嘸御疲れで御座いましたでせう。

私達人間の背後に執念く附き纏ふてゐる暗の運命の影の怖ろしさに本當に永い間泣きました。泣き

乍らにも名譽や權威の前には何時か淺慕な虚榮心の爲め眞の魂は昏睡狀態に沈んで怖ろしさに泣いてゐた自分も忘れてしまい些細な我慾を滿すためにさても怖ろしい自分の心に居た事も御座いました。併しどんなに喜ばしい時でも樂しい時でも寂漠空虚を感ぜずに居られませんでした。此の苦しい危い懐しい人生こそ常に慰めて下さる魂のみの親がなければならない。私は偉大なるもの、力に縋り度い、慰めて貰ひ度い、「眞如の月」さでも云ひますか、それを見出し度いさ隨分あせりました偉い坊樣から何度御慈悲に就いて御話を戴いたか知れません。その度に伯母からどうして御慈悲が解らないのか、有難くないのかさ强く責められるのでした。併し私には叱られる以上責められる以上に解らして戴かないのが殘念でありました。あんなにまで思ふて吳れる伯母には濟まないさ思ひ乍らも又坊樣から解りましたか、きつさ御解りになつたでせう。有難い事ですさ云はれても、解らぬ事を戴けました。解りましたさはどうしても云へませんでした。餘りに勿体振つた樣な坊樣の態度や、日々の生活の中に時折は疑ひさ反抗心を持つた事も度々御座いました。眞如の月を見たい、誠の光りに接し度い、貴い力の御手に縋り度いさあせり乍ら、どうしても解らして戴けない。此儘では、何十年詣りをしやうが聽講しやうが到底自分には本當の佛樣の御慈悲に接する事は出來ないさ悶えました。而して悶え乍らも悲しい諦めをした事も御座いました。

「解りません」以上に御世辭も僞りも又多くを語れない私に叔母は罪深い子だ、我の强い子だ、ひがんで居るさ腹を立てゝゐた樣でした。こうした譯でお坊樣の御話が何さなく怖ろしくなつて來てなる丈け聞かないさ云ふ氣持になつてゐた私に、先生の御話は餘りに有り難いものでした。永い間泣き乍ら求めて居た事を求めさして戴いた喜びに何も申し上げる事は出來ません。力さ光りを與へて下さる生命の糧であります。宗教を唯一片の理屈さ考へてゐた私が恥かしくなりました。私達の本當に生き得る信念の養成であります。今迄の私は佛樣さ云ふ方を自分さ離して他に求めて居たので解つた樣な時もあり又解らない時もある樣な信心決定の出來ない私でした。それが先生のお話をお聞きした後の私は本當に幸福になりました。眞如の月、眞に自分のものさして味ふ事が出來る樣になりました。財産も親も失くなつた只一人であつても決して淋しくない、何時どんな時にも附き纏つて下さる貴いお方があるさいふ安心さ喜びを得さして戴きました。さても自分自らが解決する事は出來ないさ凡てを投げ出した時、何の理屈も議論もなくなつて只大きな慈悲の懐ろに抱かれてゐる自分を今度こそは本當に見出しました。先生嬉れしいま、に本當の事を申し上げて終います。平凡人の心を失はずして聖者の域に達せられた親鸞聖人（今の私にはどうしてもこんなに思はれます）のあの偉大なる人格に接しては多くの人々が眠れる魂を覺されて行くのです。

先生には本當の聖人を知らない儘、わからない儘に御慈悲を戴かせて貰ひました。

私は聖人の御人格を敎へて下さつた先生の餘りにも貴い御人格に接しては泣かずにはおれませんでした。親樣に御禮申上げるさ共に先生に御禮申し上げます。本當に有難い導きでありました。

何んだか今になつてもつさ〳〵御話が御聞きし度う御座います。今年は体さへ健康になりました。是非出熊する積りですが、先生の意味深い日常生活を拜されるさ、何んだか嬉れしくなつて一日も早く其の日が來ればさ喜んで待つて居ます。勝手な事をくど〳〵さ書き立て——失禮の程は御赦しを願います。申し後れましたが、先生が街頭に托鉢行乞されて經營されてゐます社會救濟事業に月々尠々ですが、心から喜捨をさせて戴き度う御座います。先は亂筆ながら失禮します。　合掌

△　△　子

352
502

事業

一、求道部……懺悔內省の奉仕者
二、社會部……社會感謝運動
三、醫療部……
四、齒科部……
　　惠マレザル人ノ爲メ診療
五、費用……供養サレタル淨財

昭和八年十月廿六日印刷
昭和八年十月廿一日發行
著作者兼發行者　熊本市大江町九品寺　田口省吾
印刷者　熊本市春日町七六〇番地　坂井政義
印刷所　熊本市春日町七六〇番地　國鐵時報社印刷部
發行所　熊本市求道會館　社會事業部

終